

留学での経験を可視化するための 量的・質的分析を用いた基礎的研究

山 川 健 一

A Preliminary Study of the Impact of a Five-month Study Abroad Program:
An Integration of Quantitative and Qualitative Approaches

Kenichi YAMAKAWA

Abstract

Existing research and individual personal experiences clearly show that a study abroad experience has a tremendous impact on learners' target language proficiency and personal growth. On the other hand, more research will be required to gain a better understanding of the "process" of learners' internal changes during a study abroad program. The present study focuses on a five-month study abroad program for English majors at a women's university in Japan. A total of more than 100 participants studied at two universities in California, USA, in the same period and were required to write a personal digital report every week. In order to avoid compiling a subjective collection of learners' monologues or presenting a mere overall tendency that masks individual learners' variation, the data were analyzed both quantitatively and qualitatively. Integrating the two research methodologies is crucial in illustrating learners' changing perspectives of learning English and adjusting to American culture. In the article, learners' changing processes during a study abroad program will be reported by making comparisons of the data obtained at the two campuses and at different times, along with some illustrative individual cases.

キーワード : study abroad, process, quantitative approach, qualitative approach, text mining

1. はじめに

本論¹⁾は、5か月間の留学プログラムに参加した日本人大学生が留学で経験したことを量的・質的手法を用いて可視化しようとする試みの報告である。留学プログラムでアメリカの異なる2つの大学にホームステイをしながら語学留学した大学生のうち56名が調査対象者となった。調査対象者は留学期間中、約週1回ウェブ型ポートフォリオにその週の振り返りを記入するように求められた。そして、集められた振り返りの記録は、留学終了後にテキストマイニングの手法に

よって処理が行われ、①留学中に学生が経験したこと、②2つの異なる留学先での学生の経験の比較、③留学中の時間の経過に伴う学生の経験の変化、について分析がなされた。以下、その試みの報告を行う。

2. 問題の所在

近年の、特に経済活動のグローバル化に伴い、教育界においても「グローバル化」に対応できる人材の育成が急速に求められてきた。高等教育機関においても、グローバル人材育成を念頭に置いた教育内容の構築は喫緊の課題となっている（本名・竹下・三宅・間瀬, 2012; 西山・平畑, 2014; 徳永・粕井, 2011; 横田・小林（編）, 2013 など）。グローバル人材育成推進会議（2011）は、「グローバル人材」について、①語学力・コミュニケーション能力、②主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、③異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー、の3つの要素から成ると定義している。一般的に、これら3つの要素の育成に留学は何らかの形で資することは容易に期待できる。高等教育機関においても、「留学プログラムの拡充」「ダブルディグリー」「英語による専門教育」「全員留学」「多様な留学生の受け入れ」などの取り組みは、カリキュラムの一部を構成する要素になっているだけでなく、大学としての社会的ブランディングを高める戦略として広く取り入れられてきている²⁾。文部科学省（2019）は、日本学生支援機構の行っている「協定等に基づく日本人学留状況調査」に言及し、大学等が把握している日本人学生の海外留学状況は2017年度で、105,301人（対前年度比 8,448人増）であると報告している。若者の「内向き志向」が危惧されるようになって久しいが、留学者の総数でいうと留学は重要な教育的施策の一つであるといえる³⁾。

留学の重要性は日本国内のみならず世界的に認識されている現象である。留学に関する研究（research in study abroad）は1990年代から本格的に始まり（Sanz & Morales-Front, 2018）、*Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*（1995年創刊）や*Study Abroad Research in Second Language Acquisition and International Education*（2016年創刊）などの専門学術雑誌も登場してきた。加えて、留学研究に特化した書籍も、Berg, et al. (eds.) (2012), Brewer (eds.) (2010), Deardorff (ed.) (2009), Deardorff (2015), Kinginger (2009), Kinginger (ed.) (2013), Lewin (ed.) (2009), Savicki et al. (eds.) (2015), Taguchi (2015), Sanz & Morales-Front (2018) などの多くの著作が近年出版されている。

留学で期待される教育的効果の最大のもの、やはり外国語能力（多くの場合、英語力）の向上である。高等教育機関で何らかの留学プログラムを有する場合、留学前後の学習者の英語能力テスト（例えばTOEIC[®]など）の得点の変動で留学の効果を見ようとする場合が多い。または、それに付け加えて、留学終了後のアンケート調査等の自由記述等で学習者の留学の経験を評価する場合が多い。実際、留学経験者の多くが留学後の英語能力テストで顕著な伸長を見せることが多いが、英語力が低くても留学先で充実した生活を送っている場合もあるし、その逆の場合もある。しかし、英語力の変化がどうであれ、学習者は留学後に自分の内面の何らかの変化や成長を感じ取っている場合が多い。Benson et al (2012) が述べているように、留学は「全人的で潜在的に人生を変えるような経験」(p.173) である。そのような内面的な変容のプロセスは、留学前後の英語能力テストの得点の変化や、留学後に行われるアンケートだけでは十分にとらえられていないのが現状ではないだろうか⁴⁾。よって本論では、学習者の留学中の経験と変容のプロセス

を明らかにするために調査を行った。

3. 調 査

3.1 調査目的

本調査では、学生の留学での経験のプロセスを探索的に調べるために、以下の3つのリサーチ・クエスチョンを設定した。

- ①留学中に学生は何を経験しているのか
- ②2つの異なる留学先で学生の経験に差はみられるのか
- ③時間の経過とともに学生の経験には変化がみられるのか

これら3つの調査目的について、学生の留学中の記録のテキストを題材にして量的・質的の両面から分析を行う。

3.2 調査方法

3.2.1 調査対象者と調査対象の留学プログラム

本調査で対象となった留学プログラムは、筆者が勤務する大学の英語英米文学科（以下、本学科）の学科プログラム（Study Abroad for Yasuda Students, 以下STAYS）である。STAYSは現時点（2019年度）で30年の歴史があり、学生は2年次後期に原則全員が約5ヵ月間の留学をする。本調査では2015年9月中旬から2016年2月中旬の5ヵ月間に留学した学生のデータを用いた。現在と異なり2015年度当時は、学生の留学先はアメリカのカリフォルニア州にあるA大学とB大学の2大学であり⁵⁾、学生の希望に基づいて分かれて留学した。

A大学とB大学では、学生はどちらも現地家庭にホームステイしながら、他国からの留学生と混合で英語力一般を向上させる現地大学既存の10週間のプログラムと、本学独自の4週間のプログラムの2種類を受講する。しかしながら、留学の生活形態はこれら2大学では大きな差がある。A大学は公共交通機関が細かく発達していない地域にあるので、学生はホストファミリーの車で毎日の通学や休日の外出の送迎をしてもらうようになり、行動の自由度がかなり低い。一方、B大学では学生は自転車、またはバスと自転車の通学となり、行動の自由度がA大学と比較して非常に高くなっている。

2015年度の留学には、本学科の2年生115名がA大学に81名、B大学に34名に分かれて留学した。本調査では、この115名のうち調査に任意で参加した56名（全体の49%）を分析の対象にした。内訳は、A大学37名（A大学の46%）、B大学19名（B大学の54%）であった。調査に参加した56名は、留学前に受検したTOEIC[®] Listening & Reading Testでは、分散分析を行った結果、留学先別では有意な差はみられなかった（ $F(1, 50) = 1.833, p = 0.1819$ ）。

3.2.2 データ収集

学生は、留学中に週に約1回程度その週の振り返りを任意で行い、その週の出来事や自分の考えや感情を「日本語」で記録するように求められた。記録する際は、本学のポータルサイトにあるウェブポートフォリオが用いられた。この記録はあくまでも、学習者自身が書く日記形式の記録であり、大学や筆者に対して行う報告ではないことが事前に説明された。また、本調査で得られた個人情報、個人が特定できる形式では一切外部に出さないと事前に周知された。上述し

た留学学生115名のうち、これに1回以上参加した学生は56名であった。総投稿数は301件で、一人あたり平均5.3件で、最高が19件で最低が1件であった。収集したテキストデータ（以下、データ）は、1件の投稿につき基本的に1つのパラグラフとし、各投稿には留学先大学と投稿時期（月）の情報がタグ付けされた。

分析には、樋口耕一氏が開発した、テキスト型（文章型）データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアであるKH Coder（Ver. 2.00fならびに一部Ver. 3. Alpha.17）を用いた（詳細は、樋口、2014や末吉、2019を参照のこと）。

3.3 調査結果と考察

まず、データの全体像であるが、KH Coderによる分析により、単語のトークン数は104,131語（A大学52,988語、B大学51,143語）で、タイプ数は6,220語（A大学3,597語、B大学4,259語）であった。文の総数は5,045文であり、パラグラフ数は542個であった。以下、3.1で述べた3つのリサーチ・クエスションの結果と考察について順次述べていく。

3.3.1 調査目的①

ここでは「留学中に学生は何を経験しているのか」に関連する結果について報告する。KH Coderの抽出語リスト作成機能を用いて、データ内で70回以上出現した上位64語（以下、上位抽出語）のリストを作成した（表1）。

表1. データ内で70回以上出現した64語の上位抽出語リスト（単位：出現回数）

思う	802	話す	179	頑張る	115	違う	85
自分	494	時間	177	会話	114	日本人	85
人	385	来る	161	笑	112	今日	83
授業	355	たくさん	151	クラス	111	テスト	82
言う	350	留学	150	終わる	111	毎日	81
ホスト	329	前	149	少し	110	パーティー	80
日本	320	帰る	145	最近	107	始まる	80
英語	310	家	138	考える	105	出る	77
アメリカ	272	聞く	137	食べる	103	入る	77
行く	245	多い	132	家族	101	使う	76
感じる	212	見る	128	出来る	100	月	75
友達	207	生活	126	クリスマス	95	他	74
楽しい	206	過ごす	123	安田	95	受ける	73
本当に	202	勉強	123	一緒	93	留学生	73
今	197	話	121	日本語	87	嬉しい	71
先生	179	マザー	120	学校	86	書く	71

次にこの64語に対して、KH Coderを用いて集計単位を「文」にして共起ネットワーク分析を行った。その結果、図1のように6つのグループ（G1～G6は図1内では異なる色で示されている）が得られた。共起ネットワーク分析では、文書中に出現する語と語が共に出現する関係性を線の繋がりで確認することができる。ただしネットワーク内の語と語の近さの位置関係には意味はない。また、円の大きさは抽出語の出現頻度を表している。

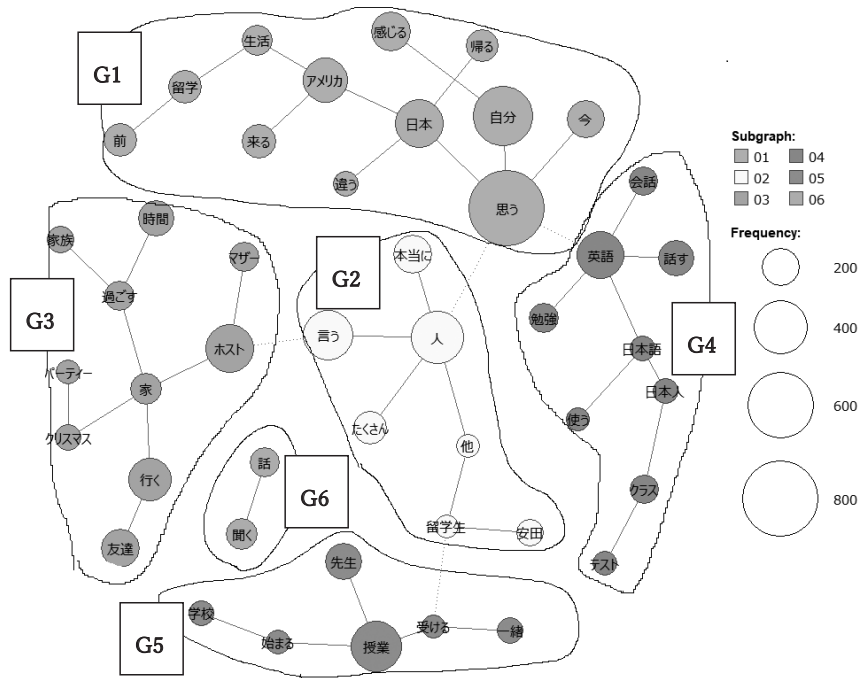


図1. データ内の上位抽出語の共起ネットワーク分析

図1の各グループに属する語群から言えることとしては、G1は留学生生活を振り返ったり、ややメタ的視点から報告したりするような語彙が多いといえる。G2は他者、とりわけ留学先大学内で遭遇する留学生や同じ大学の友人についての語彙が多い。G3はホストや友人との交流に関する語彙が多い。G4は英語や日本語の言語使用に関する語彙が目立つ。G5は留学先大学での授業に関する語彙が中心である。G6は「話」と「聞く」の2語であるが、他者との言語を用いたやり取りを表している。このことから、学生の記述は、①「大学の授業とそこで人間関係」(G2とG5)、②「言語使用」(G4とG6)、③「ホストファミリーと友人との交流」(G3)、④「振り返り」(G1)の4つのグループに分けることができる。したがって、調査目的①の結果としては、留学中に学生が経験していることはこれら4つの領域であるということが、少なくとも学生のポートフォリオの記述から推測することができる。

3.3.2 調査目的②

ここでは2番目の調査目的である「2つの異なる留学先で学生の経験に差はみられるのか」に関連する結果について報告する。表2は、A大学とB大学のそれぞれのデータの特徴づける上位10語をKH Coderを用いて算出したものである。表内の数値はそれぞれの語とA大学とB大学との関連を表すJaccardの類似性測定で、0から1までの数値を取り。関連が強いほど1に近づく(樋口, 2014, p.39)。表2内の語は、A大学とB大学それぞれで特に高い確率で出現している語である。

表 2. A大学とB大学で見られた特徴的な語

A大学		B大学	
思う	.157	自分	.095
ホスト	.078	人	.080
授業	.073	アメリカ	.064
言う	.068	英語	.063
日本	.065	本当に	.057
感じる	.054	行く	.053
友達	.047	先生	.047
話す	.043	楽しい	.046
時間	.038	今	.043
来る	.036	帰る	.040

数値はJaccardの類似性尺度

3.2.1でも述べたように、A大学とB大学では学生の生活の自由度という意味でかなり異なる。B大学では学生の自由度はかなり高いのに対して、A大学では学生の日常はホストファミリーと大学の授業が中心となる。この生活パターンの違いが、A大学の特徴語である「ホスト」や「授業」に現れていると考えられる。一方、B大学の方では、「自分」や「英語」などの語が特徴的となっている。B大学では行動の自由が高い分、英語を用いる機会が大学やホスト宅以外にも多くあり、その中で自己と他者の関係について考察することが多くなったからではないかと推測できる。

また、A大学とB大学の特徴を探るために、表1の70回以上出現した上位64語の抽出語に対してKH Coderを用いて対応分析（コレスポンデンス分析）を行った（図2）。

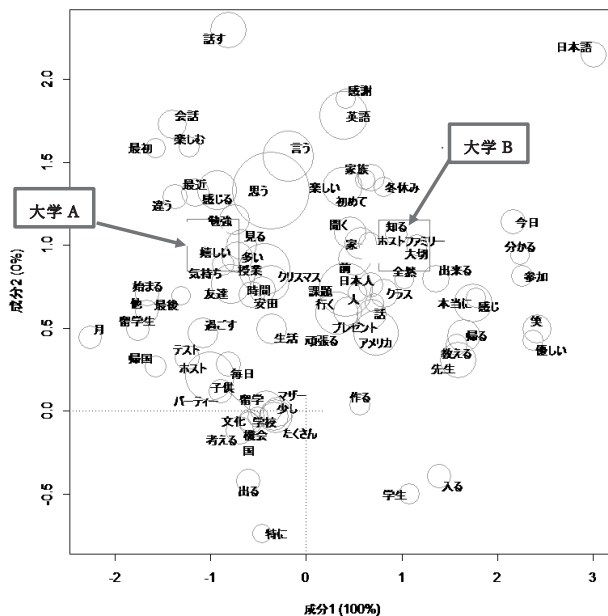


図 2. 対応分析によるA大学とB大学の特徴

対応分析では、出現パターンに取り立てて特徴のない語が、原点 (0, 0) の付近にプロットされる。図2において、大学Aと大学Bの文書全体がそれぞれ矢印で示された四角の枠の位置にプロットされているが、ここに近い場所でプロットされている語が、それぞれの大学を特徴づける語となっている。これらの語は、表2で示されたA大学とB大学のそれぞれで特徴的である語と一致している。

次に、これらの特徴的な語が実際にどのような文脈で用いられているのかについて見てみる。ここでは表2の中から、A大学とB大学のそれぞれで特徴的な語であった「ホスト」と「楽しい」に注目してそれぞれ見てみる。

「ホスト」はA大学で201回出現しており、以下の例のように3つの場面で主に用いられていた。

1) ホストファミリーとの関係性

「ホストは自分の味方でいてくれて、本当の娘のように接してくれています。」

2) 英語でのコミュニケーション

「自分の言いたいことがなかなか言えなかったり、ホストの言っていることがわからないことも多くて悩むこともあります…」

3) 家族内のイベント

「おばあちゃんの誕生日を祝うためにそのおじいちゃんのおうちにホストと一緒に遊びに行きました。」

次に「楽しい」であるが、108回出現しており、以下のような4つの場面で主に用いられていた。

1) 友人との関係性

「コロンビアの男の子と台湾の女の子は良く話しかけてくれるので、楽しすぎます。」

2) ホストファミリーとの関係性

「ホストマザーとの生活は相変わらず楽しい。」

3) 生活一般

「もう生活にもだいぶ慣れてきて授業も始まり、新しい友達もでき、毎日楽しい日々を送っています。」

4) 大学生活

「授業が生徒主体で、とても楽しい。」

3.3.3 調査目的③

ここでは3番目の調査目的である「時間の経過とともに学生の経験には変化がみられるのか」に関連する結果について報告する。表3は3.3.2で報告したA大学とB大学での特徴的な語を今度は月ごとに分けて表現したものである。表内の黒い矢印は、A大学とB大学の両方で同じ時期(月)に現れている特徴的な語である。例えば、到着直後の10月では「英語」と「話す」が現れており、学生が英語を使いながら生活するのが関心の中心になっていることが推察できる。そして12月になると、「クリスマス」という留学中で最大のイベントがあるのでこれが登場しているのは当然であろう。1月になると、日本への帰国について思いを馳せるようになり、帰国する2月になるとホストや日本の家族や関係者への「感謝」の言葉が増えるようになっている。一方、表内の灰色の矢印はA大学とB大学の各キャンパスでそれぞれ見られた特徴的な語であり、当然これらは表2と図2において観察された特徴的な語である。A大学での「ホスト」は留学期間中

1月以外ほぼずっと特徴的な語として表れている。これは上述したように、A大学でのホスト中心の生活の反映であると考えられることができる。一方、B大学の特徴語の一つである「楽しい」は主に留学前半の10月と11月に主にみられることが分かる。また、B大学で特に特徴的であった「自分」という語（表3の白い矢印）については、ほぼ期間中ずっと特徴的な語として現れている。このことから、上述したように、B大学の振り返りでは「自分」の内部や周囲との関係について振り返る機会が多かったと推測できる。

表3. A大学とB大学での月ごとにみられた特徴的な語

A	10月	A	11月	A	12月	A	1月	A	2月
思う	.109	日本	.059	思う	.074	帰国	.065	留学	.046
授業	.095	言う	.056	人	.057	思う	.065	ホスト	.043
自分	.081	人	.052	自分	.057	アメリカ	.053	行く	.040
ホスト	.076	最近	.049	クリスマス	.055	日本	.047	最後	.039
言う	.072	感じる	.048	日本	.048	友達	.039	思う	.038
英語	.069	授業	.046	サンフランシスコ	.047	留学	.037	感謝	.038
話す	.066	ホスト	.044	過ごす	.047	成人	.035	英語	.038
感じる	.054	テスト	.039	ホスト	.047	嬉しい	.033	成長	.037
今	.048	時間	.035	終わる	.044	少し	.033	本当に	.035
会話	.048	友達	.035	感じる	.043	クリスマス	.033	泣く	.032
B	10月	B	11月	B	12月	B	1月	B	2月
自分	.069	言う	.077	クリスマス	.070	思う	.074	DAVIS	.067
授業	.067	人	.056	家族	.060	自分	.073	留学	.061
人	.062	日本	.055	プレゼント	.052	人	.062	スピーチ	.052
英語	.052	行く	.054	自分	.052	日本	.054	関係	.048
楽しい	.048	アメリカ	.053	先生	.047	帰る	.053	感謝	.046
感じる	.042	笑	.045	冬休み	.042	アメリカ	.053	喋る	.041
日本語	.042	楽しい	.045	アメリカ	.040	英語	.049	自分	.041
本当に	.040	本当に	.043	本当に	.039	本当に	.048	人	.040
話す	.039	聞く	.039	行く	.037	出来る	.038	出会う	.037
時間	.038	先生	.039	家	.036	今	.038	友達	.036

数値はJaccardの類似性測度

次に、3.3.2で行った対応分析を、A大学とB大学のそれぞれの月ごとに行った（図3）。そして図3内の矢印の範囲の部分を拡大したのが図4である。図4からわかるように、分析対象の10個の文書（2大学の5か月分のデータ）はそれぞれ異なる座標の地点にプロットされている。

次に、この10個の文書が実際どの程度類似または相違しているのかについて、A大学とB大学の月ごとの計10文書に対して、KH CoderによるJaccard距離を用いたWard法によるクラスター分析を行った。その結果、図5のデンドログラムに示されたように4つのクラスターが得られた。図5からわかるように、第1のクラスターはA大学10月とB大学10月・11月の3文書であった。第2クラスターはA大学11月・12月・1月とB大学12月・1月の5文書であった。第3クラスターと第4クラスターは、それぞれA大学2月とB大学2月の計2文書であった。これら4つクラスターのうち最後の2つはどちらも留学期間の最終月である2月であることを考えると、学習者の記述は、①留学開始期（10月～11月）、②留学中期（11月～1月）、③留学最終期（2月）の3つの段階に分かれるといえる。そしてこのことから、調査目的③について少なくとも学生の記述内容から判明することとして、時間の経過とともに学生の経験には変化がみられると言える。そして2つの留学先を比較した場合は、11月と2月がそれぞれ異なるということが言える。

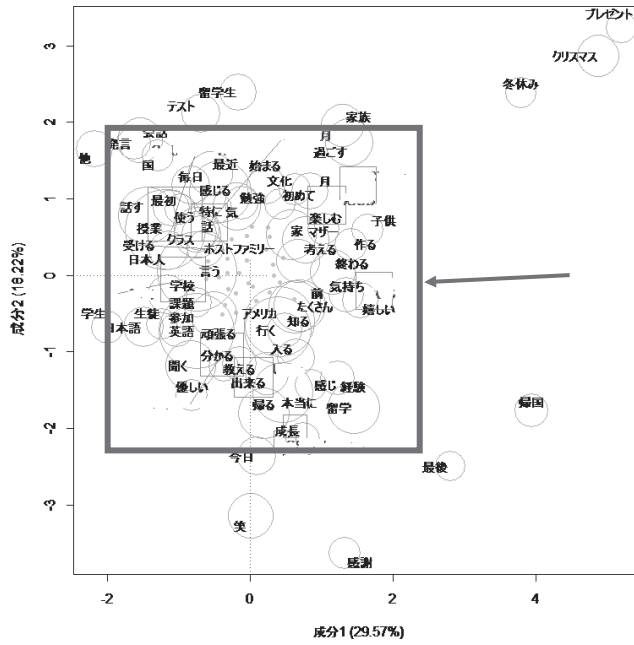


図3. 対応分析によるA大学とB大学の月ごとの特徴

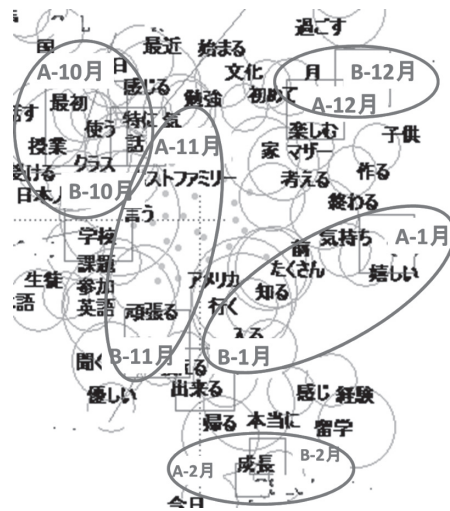


図4. 対応分析によるA大学とB大学の月ごとの特徴 (拡大図)

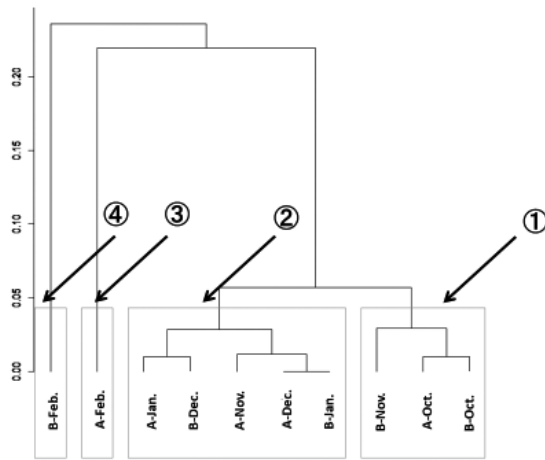


図5. A大学とB大学の月ごとの文書のクラスター分析のデンドログラム

4. 結 語

本論では、留学経験者の経験を量的・質的手法を用いて可視化を試みた。留学中の振り返りの記録をテキストマイニングの手法で分析した結果、以下のことが判明した。調査目的①の留学中に学生が経験したことについては、「大学の授業とそこでの人間関係」「言語使用」「ホストファミリーと友人との交流」「振り返り」の4つにまとめることができた。調査目的②の2つの異なる留学先での学生の経験の比較については、留学期間中に感じる気持ちの変化という点では類似性があったものの、特徴的な語の出現という点では、2つのキャンパスに差がみられた。この差はそれぞれのキャンパスでの生活様式に起因すると考えられる。調査目的③の留学中の時間の経過に伴う学生の経験の変化については、3つの段階（4つのグループ）に分けられ、時間の経過に伴う経験の差が明らかになった。また、2つの異なるキャンパスでは11月と2月のデータが異なるグループに属すると判断された。

本研究の限界としては、収集されたデータは任意で調査に参加してくれた大学生であり、加えて参加者の中でも振り返りを書いた分量に個人差がみられたことが挙げられる。よって、結果の一般化には注意が必要であろう。また、質的な分析の面では、多量のデータを扱ったということもあり、事例の選択がどうしても恣意的になる可能性がある。

今後の必要な研究の方向性について述べる。今回は留学時のポートフォリオを分析対象としたが、留学中や留学後のインタビューを併用することにより、さらに直接的に学習者の内面に迫ることができると考えられる。また、学習者の留学中の内面の変化を引き起こす「原因・きっかけ」について、よりミクロな視点で経験を分析していく必要がある。最後に、一般的に留学後は学習者の学習意欲が高くなっていることが経験的に知られているが、その状態が永続的に続かないということもよく認識されている。学習者の学習意欲の減衰のメカニズムとそれを防ぐための教育的支援はどのようにすればよいかについて、さらに知見を深めていく必要がある。

註

- 1) 本論は、2016年12月にシンガポール国立大学で開催されたTHE SEVENTH CLS INTERNATIONAL CONFERENCE (CLaSIC 2016) での口頭発表 (A preliminary study of the impact of a five-month study abroad program: An integration of quantitative and qualitative approaches) を加筆・修正したものである。
- 2) 例えば、子島・藤原 (2017, p.4) では「海外体験学習」の種類として、①長期留学、②語学研修、③インターンシップ・社会起業体験、④海外研修 (フィールドスタディ)、⑤サービスマーケティングを挙げ、留学の多様性を記述・分類している。
- 3) 太田 (2018) は日本の海外留学促進政策の変遷について詳細にまとめている。
- 4) 例えば山川 (2019) では、留学の評価の方法としてのTOEIC[®]やアンケートの利用の問題点について論じている。
- 5) 現在 (2019年) の留学先は、アメリカ2大学とカナダ1大学の計3大学である。

謝辞

本研究は、JSPS科研費 15K12925 (「留学が学習者の英語力と内面的変容に及ぼす効果の統合的メカニズムに関する縦断的研究」と18K00769 (「留学の効果を最大化する留学事前事後の教育プログラム開発のための基礎的研究」) の助成を受けました。また、本調査に参加して下さった学生の皆様方に感謝申し上げます。

参考文献

- Berg, M. V., Paige, R. M., & Lou, K. H. (Eds.). (2012). *Student learning abroad: What your students are learning, what they're not, and what you can do about it*. Sterling, VA: Stylus.
- Brewer, E., & Cunningham, K. (Eds.). (2010). *Integrating study abroad into the curriculum: Theory and practice across the disciplines*. Sterling, VA: Stylus.
- Kinginger, C. (2009). *Language learning and study abroad: A critical reading of research*. New York: Palgrave Macmillan.
- Kinginger, C. (2013). *Social and cultural aspects of language learning in study abroad*. Amsterdam: John Benjamins.
- Deardorff, T. W. (Ed.). (2009). *The SAGE handbook of intercultural competence*. Thousand Oaks: SAGE Publications.
- Deardorff, T. W. (2015). *Demystifying outcomes assessment for international educators: A practical approach*. Sterling, VA: Stylus.
- グローバル人材育成推進会議 (2011). 「グローバル人材育成推進会議 中間まとめ」 http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_kyodo/sanko1-1.pdf
- 樋口耕一 (2014). 『社会調査のための計量テキスト分析』 京都: ナカニシヤ出版。
- 本名信行・竹下裕子・三宅ひろ子・間瀬幸夫 (編) (2012). 『企業・大学はグローバル人材をどう育てるか』 東京: アスク出版。
- Lewin, R. (2009). *The handbook of practice and research in study abroad: Higher education and the quest for global citizenship*. New York: Routledge.
- 文部科学省 (2019). 「『外国人留学生在籍状況調査』及び『日本人の海外留学生者』」 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afldfile/2019/01/18/1412692_1.pdf
- 西山教行・平畑奈美 (編) (2014). 『グローバル人材再考』 東京: くろしお出版。
- 太田浩 (2018). 「日本の海外留学促進政策の変遷」 横田雅弘・太田浩・新見有紀子 (編) 『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト』 (pp. 2-28) 東京: 学文社。

- Sanz, C., & Morales-Front, A. (Eds.). (2018). *The Routledge handbook of study abroad research and practice*. New York: Routledge.
- Savicki, V., & Brewer, E. (Eds.). (2015). *Assessing study abroad: Theory, tools, and practice*. Sterling, VA: Stylus.
- 末吉美喜 (2019). 『テキストマイニング入門』 東京: オーム社.
- Taguchi, N. (2015). *Developing interactional competence in a Japanese study abroad context*. Bristol: Multilingual Matters.
- 徳永保・舩井圭子 (2011). 『グローバル人材育成のための大学評価指標』 東京: 協同出版.
- 山川健一 (2019). 「留学の効果の検証と留学プログラムの評価の動向と今後の課題」 第25回大学教育研究フォーラム口頭発表資料.
- 横田雅弘・小林明 (編) (2013). 『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』 東京: 学文社.